

授業で学級をつくる

富山大学附属小学校 教諭 前田 正秀
MAIL maeda@fes.u-toyama.ac.jp
URL <http://www6.plala.or.jp/maeda-masahide>



☆☆ よさを認めあえる学級づくり

(1) 「分かるよ」が聞こえる授業

授業をしていると、子どもが間違っただけを言う時がある。

そんな時、周りの子がどんな反応をする学級であってほしいだろうか。

「違いまーす」と大声で間違いを指摘する子がいる学級だろうか。

それとも、間違っている子を傷つけないように、そっと間違いに気付かない振りをする学級だろうか。

どちらも、何だか寂しい気がする。

私は、子どもの中から、

「〇〇さんの考えたこと分かるよ」「きっと〇〇さんは、こう考えたんだよ。でもね…」という言葉が出てきてほしいなと思っている。

“間違いの中に潜むよさを認めあえる”

そんな学級であってほしい。

～ある日の授業風景①～

こんなことがあった。

右の問題を解いた後に、正三角形が5個の場合の周りの長さを考えた時のことである。

加藤君という子が、問題を聞いて即座に「分かった。8cmだ」と答えた。

正解は7cm。つまり、加藤君の答えは間違いである。そこに、

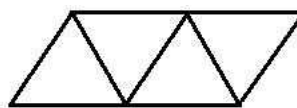
「加藤君の考えたこと、分かるような気がする」

と1人の女の子が手を挙げた。

「正三角形を4個から5個に増やす時、線を2本書き足すでしょ。だから、加藤君は、2cm増えると思ったんだと思う。でも、本当は、2本増えるんだけど、ここの1本が周りの長さじゃなくなるから、2-1で1cmだけ増えます。だから答えは7cmです」と女の子は説明した。

“さっきより1cm増える”という説明を聞いて、ある子が「だったら、正三角形が

【問題】まわりの長さは？



【答え】6cm

6個になったら、もう1cm増えて、8cmになるんじゃないの」とひらめき、「7個なら、9cmだ」と他の子も続いた。

私は、そんな様子を見ながら、何だか心があつたかくなった。

“8cm”という“答え”だけを見ると正解ではない。しかし“実際に数えずに求める”“前と比べて次を予想する”という“考え方”は素敵なものである。授業の終わりに「これが、今日の1番大切な考え方です」と子どもたちに話をした。加藤君は、嬉しそうにはにかんだ。

(2) 間違いを生かして高まり合う授業

“間違いを生かして、みんなで高まり合う”

そんな学級って素敵だと思う。

授業においても同じである。

～ある日の授業風景②～

三角形や四角形の学習をした時のことである。

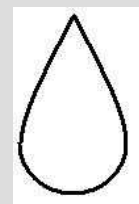
「三角形と四角形があるんだったら、五角形や六角形もあるんじゃないの」という話題になったところで、ある子が「でも、一角形や二角形はないよね」と、つぶやいた。そこに1人の子が声をあげた。

「先生、一角形もできるよ。しずくの形！」

というのである。

「一角形??？」

みんながきょとんとしていると、その子が前に来て、黒板に右のような図をかいた。



なるほど、確かにかどが1つである。

しかし、これは一角形とはいえない。間違った答えである。



私は「だったら、先生は二角形を思いついたよ。二角形は猫の形！」と言い、かどが2つある形を板書してみせた。

さらに「三角形は、チューリップの形！」と、書き加えた。



子どもたちから、「そんなの三角形って言わないよ！」という声があがった。そこで、チューリップの形をを三角形と言わない理由を話し合った。話し合いの中で、子どもたちは「かどがあるだけじゃ駄目。3本の直線が必要よ!」「曲がった線じゃ駄目。直線で囲まれないと!」と、三角形の定義を見つめ直していった。

しずくの形の一角形をきっかけに、みんなの考えが高まったのである。

(3) 認め合える学級だから、自分らしさを発揮できる

“間違いの中によさを認め、間違いを生かして高め合う授業”

そんな毎日の授業の積み重ねがあって、“互いのよさを認め合い、高め合う学級”がつけられるのだと、私は考える。そんな学級では、1人1人が自分らしさをのびのびと発揮することができる。

練習問題の答え合わせの際、答えを子どもに発表させ、他の子どもたちに「合ってまーす」や「違ってまーす」と大声で言わせる学級を見かけることがある。

正答か誤答かという視点で友だちの考えを聞き、間違っただけの子を大声で「違ってまーす」と責める。そんな学級を見ると、少々寂しくなる。

そもそも、多様な考え方があり、それぞれの考えによさがあるからこそ、子どもに発言させるのである。正答が1つしかないのであれば、何も子どもに答えを言わせる必要はない。教師が言ってしまった方が効率的である。

答えはさっさと教師が伝えてしまい、その後に「どんな間違いをしたか紹介してくれる人はいませんか」と尋ねる。そんな温かな授業でありたいと思う。

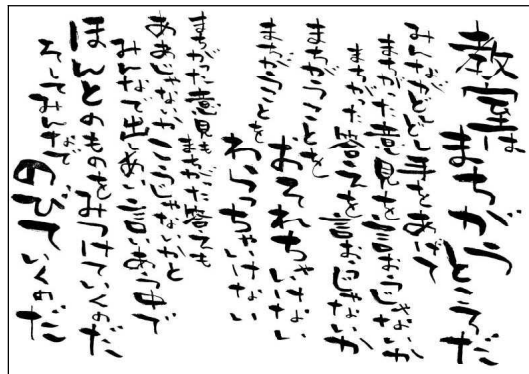
☆☆ 間違えた子がヒーローになる授業づくり

(1) ヒーロー体験が、子どもを変える

有名な言葉に、「教室は間違うところだ」という言葉がある。私も大好きな言葉である。

しかし、「教室は間違うところだ」と100回言ったからといって、やっぱり間違えるのは恥ずかしいに決まっている。

間違いを恐れずに発言できる学級にするには、間違えた子がヒーローになる授業をいっぱいしなければなるまい。間違えてヒーローになった体験があってこそ、子どもはのびのびと自分の考えを言えるようになるのである。



(2) 間違いはチャンス

それでは、間違えた子がヒーローになる授業をするためには、どうすればよいのだろうか。

まず第一に、“子どものよさに寄り添おう”とする教師の気持ちが大切だと思う。

子どもが教師の意図しない発言をした時、

“面白い発言”と思えるか。

“都合の悪い発言”とってしまうか。

そうした教師の気持ちが大切だと思う。

都合の悪い発言を切り捨てて授業を進める教師が、「友達のよさを認め合いましょう」と言っても、子どもたちは聞くはずないのである。

老月先生がよく言われる学級づくりの言葉に“トラチャン（トラブルがあった時こそ学級が成長するチャンス）”という言葉がある。授業においても同様である。間違いがあった時こそ、それを生かして互いの考えを深めるチャンスにしたい。

(3) 気持ちだけでは、子どものよさを生かせない

それでは、“子どものよさに寄り添おう”という気持ちだけ、授業はうまくいくだろうか。そうではあるまい。間違いを生かすだけの“教材観”や“指導技術”も必要になってくる。

～ある日の授業風景③～

ある教育実習生が「倍数と約数」の授業をした時のことである。

約数を求める練習問題をしていると、1人の子が右のようなノートを書いていた。

12の約数を求める問題と16の約数を求める問題をした後に、「2」に○を付け、「最小公約数」と書き添えたのである。

そこに教育実習生が机間指導でまわってきた。ノートを見た教育実習生は「最小公約数って言葉はないよ。最大公約数って言葉ならあるけど…」とあっさり指導してしまった。

私はもったいないなと思った。面白い間違いであったのに…。

こんなこともあった。12と16の最大公約数の求め方を考えていると、1人の子が「ひき算で答えが出るよ。16-12をすると最大公約数になる」と発言した。それを聞いた実習生は「ああ、偶然だね…」と、その考えを流してしまった。

私はもったいないなと思った。面白い間違いであったのに…。

【ある子のノート】

12の約数 {1、②、3、4、6、12}

16の約数 {1、②、4、8、16}

↑

最小公約数

【ある子の考え】

【問題】 12と16の最小公約数は？

【答え】 4

【理由】 $16 - 12 = 4$ だから

決して悪い教育実習生ではなかった。むしろ「子どもの個性を生かしたい」という愛情に満ち溢れた実習生であった。しかし、まだ学生なので“教材観”や“指導技術”が未熟だったのである。

(4) だから、授業研究

時折、次のような言葉を耳にすることがある。

「研究授業なんかをするよりも、子どもと向き合うことに時間を注ぎたい」

私は、そんな言葉を聞くと、何だか違和感を感じてしまう。授業の腕を磨くことなしに、子どものよさを引き出すことなど出来ないと思うからである。

医者が患者を診察するには、医学の知識が必要である。教師が子どものよさを認めるためには、確かな“教材観”が必要だと思うのである。

授業で学級はつくられる。

だからこそ、日々、授業の腕を磨いていきたい。

まとめ

互いに認め合う学級の風土は、互いに認め合う授業によってつくられる。そうした授業を行うためには、“子どもに寄り添う気持ち”と“指導技術”が必要である。



【宣伝】

公開授業の案内

日 時： 平成24年1月30日（月）
13：40～14：25 授業
14：40～16：30 協議会

場 所： 富山大学附属小学校（富山市五艘1300）

参加費： 無 料

授業者： 前田 正秀

単元名： 第5学年 算数 ※単元は、まだ未定です

指導助言者： 中川 慎一（算数科学習指導要領 執筆者）

申込・連絡先： 076-445-2803（富山大学附属小学校）

ホームページの紹介

HP名：前田の算数

内容：算数の実践紹介

URL： <http://www6.plala.or.jp/maeda-masahide>

